

夢枕獏

雨晴れて

月は朦朧の夜

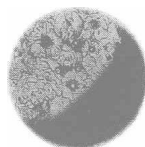


雨降る月

雨降る月
は朦朧の夜

雨降る月

雨降る月



AME HARTE: ISE KAWA MOJIBU NO YORI

雨晴れて月は朦朧の夜

一九九六年六月五日 初版発行

著者 夢枕 獏
発行者 蝦治真起

発行所 株式会社 波書房

〒一五一 東京都渋谷区笹塚二―一八―三 LKビル二F

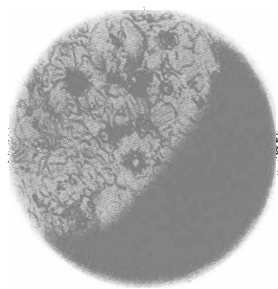
電話 〇三(五三七二)七三五六
振替 〇〇一七〇―二―四九二五一
印刷 有限会社サンエイト
製本 株式会社 明光社

*定価はカバーに表示してあります。

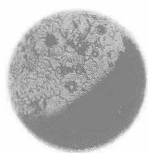
*落丁本・乱丁本はお取り替えます。

1996 ©Baku Yumemakura

ISBN4-8164-1241-7 Printed in Japan



目次



目次

蛇淫
じゃいん

5

骨董屋
こっとうや

45

鳥葬の山

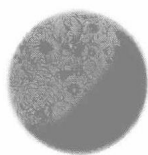
83

中有洞
ちゅうとうどう

125

ころぼっくるの鬼

157



おしやぶりの秘密

177

あやかし

199

ふたりの雪

215

1
／
60
秒の女

225

暗い優しいあな

239

あとがき

248

装幀 石倉七口ユキ
装画 天野喜孝

蛇じゃ

淫いん

あまやかな声が聴こえている。

闇の奥から、途切れ途切れに、低く、高く、時折、うねるようにその声が伸びる。低い時には、甘えた猫の声のようにも聴こえ、高い時には、一瞬、金属光を放つ針のように鋭くなる。

何かの言葉を、闇の中で囁いているようにも聴こえるが、その意味まではわからない。感觸だけが届いてくる。

淫らな猫の舌が、産毛に触れるか触れぬかという幽かきで、ぼくの皮膚を舐めているようだった。

女の声——。

くすぐったがつているようだけれど、そうではない。

小さく呻き、低く吐く。

高熱にうかされた人間が、闇の中で何かの苦痛に耐えているような声でもあった。

何かを耐えに耐え、その耐えたあげくに、思わず、声が唇から洩れ出してしまうのだ。

ぼくは、人が——いや、女が、どのような時に、そのような声をあげるのかを知っている。

男の指や、唇や、舌が、その皮膚や皮膚ではない部分を這い、指や、唇や、舌でないものが、その皮膚でない部分に潜り込み、動く時に、女はそのような声をあげる——。

闇の下方、ベッドに仰向けになったぼくの背中の下から、その声がとどいてくるのである。

その声が、背を撫であげるたびに、ぼくの背骨に、ぬるりとした妖しい戦慄が疾走り抜ける。ぼくの脚の間に、熱く瘤のように堅い一匹の蛇が育っていた。その蛇が、パジャマの布地を、痛いほど押し上げている。

こめかみで、心臓が鳴っている。

閉じた瞼の下で、きつと、ぼくの眼は赤く充血し、膿んだように腫れあがっているに違いない。微かなベッドの軋み音。

しかし、その音は、はつきりぼくの耳にとどいているのではないかもしれない。ぼくの想像が、闇の中にそのような音が聴こえていると錯覚させているのかもしれない。

眼を閉じて仰向いているぼくの肉体の中で、ぼくの意識だけがうつ伏せになり、ぼくの背中から、ベッドの下方、床のさらに向こう側を覗き込もうと、闇を見すえているのだ。

興奮しているくせに、意識のどこかで、へんに醒めているぼくがいる。

肉体に溜まった愉悦を、細く切れ切れに吐き出す声——。

ぼくの母の声であった。

ぼくの父ではない人の手によって声をあげさせられているのだ。

ぼくの頭の中に、大きく折り曲げられた、白い母の身体が浮かんでいる。

どのような格好をさせられようと、母の身体からその美しさが損なわれることがあろうとは思えなかった。

ぼくの鼻孔は大きく開き、空気を求めて喘いでいた。鼻孔から吸い込む闇には、人の官能を煽る、不思議な媚薬が溶け込んでいるようであった。ぼくの肺は、隙間なく闇で満たされ、ぼくの喉は小さく音をたてていた。

地の底の密儀を、ひそかに盗み聴きする子供のように、ぼくの心臓は、息苦しく、ぎちぎちと音をたてた。

2

ぼくの母は、色の白い、美しい女性であった。

小学校にあがった時から、ぼくは、母の美しさに気がついていた。

授業参観の時などは、複雑な気分になったものだ。

同級生の母親などは、田舎芝居から抜け出してきた、外見だけを着飾った役者女のようにしか見えなかった。友人たちから、おまえの母親が一番綺麗だったと言われるのは嬉しかったが、ぼくの母親の姿が、皆の視線にさらされることを思うと、その苦痛の方が、嬉しさよりも強かった。子供の頃から、ぼくは、自分の母を、母親として見るよりも女として見てきたように思う。実

際、手をつなぐ時でさえ、ぼくは、母の白い指の先だけをおずおずと握った。

顔を赤らめてしまう時もあったし、そんな時、自分の顔を母親から覗き込まれると、もうどうしていいかわからなかった。

髪を上にあげた時に見えるうなじの線は、白く、ほっそりと艶^{なまめ}かしく、ぼくをたまらなくさせた。陽の光を、一度も当てたことのないような肌の色であった。切れ長の眼も、ぞくりとするような黒い光を含んでいたし、唇の色も、血の色が透けて見えているのかと思えるほど赤かった。母がしゃべる時に、その赤い唇が動くのを見ているのは、たとえ一日中でもぼくは飽きなかった。その唇に喰^たべられてしまいたいと、ぼくは本気で考えたことがある。白い歯で、ぼくの身体をぷちぷちと噛^かんで欲しいと、本当に思ったこともある。

ぼくが母から受けついだのは、肌の白さと、そして赤い唇だった。肌の白さは異様なほどである。雪の白、というよりは、半透明な蠟^{ろう}の白さである。

逆に、父からぼくの肉体に受けつがれたものは、何ひとつないと、そう言ってもいいだろう。むしろ、ぼくの貌^{かお}立ちは、父の弟の、白川^{しろがわ}宇太郎^{うたろう}叔父にそっくりだと言ってもよい。高い鼻筋や、頬骨^{ほおほね}から顎^{あご}にかけての線は、驚くほどよく似ている。やや茶のかかった瞳^{ひとみ}の色も、叔父の眼の特徴であった。

ぼくは、自分が父の子ではなく、実は宇太郎叔父の息子ではないかと真剣に考えたことがあるし、現在でも、その考えを捨ててはいない。

父は、養子であった。

だから、ぼくの姓は白川ではなく、母方の鳥隅である。

——鳥隅涼一。

これがぼくの名前である。

高校を卒業だけはしたが、浪人中の身で、十九歳である。

母の名前は、鳥隅朱緒——朱^{あけ}の緒^おと書いて、朱緒^{あかお}と読ませるのだ。ぼくは、この母の名前が気に入っていた。

母は、今年で四十二歳になる。

しかし、外見だけで見ると、まだ三十五、六歳くらいにしか見えない。時折、笑う時の仕種^{しぐさ}などは、ぼくと同年齢の女性のそれのようにさえ見える時がある。

父が一年半ほど前に、四十八歳という歳で死んでから、このどちらかといえば広い家に、ぼくと母とはふたりつきりで暮らしている。正直に言って、父が死んだ哀しみよりは、母とふたりでこの家で暮らせるようになった喜びの方が、大きいように思う。

白川宇太郎叔父は、父が死んだ一年半前の通夜の晩に、どこから借りてきたらしい、窮屈^{きうくつ}そうな黒い喪服を着て、ふらりと姿を現わした。

ぼくがまだ小学校の頃に、ふいにどこかにいなくなつてから、叔父の姿を見るのは、九年ぶりのことであった。叔父は、やや肉が付き、そして、顎^{あご}と鼻の下に、薄く不精髭^{ふしようひげ}をはやしていた。粘りつくような眼つきの中に、険^{こわ}いものがあった。

叔父は、ぼくの姿を見つけ微笑したが、その時、ぼくは、叔父の眼の中に潜^{ひそ}むねっとりとした

精氣の一部が、自分の頬に張りついたように思った。

叔父——白川宇太郎は、その時、不自然なほど襟えりの高いシャツを着ていたのをまだ覚えている。当時、ぼくには知らされていなかったのだが、九年前、叔父の白川がいなくなったのは、ある女と駆け落ちしたためだった。相手の女が、ある刺青師はりもえしの娘で、こちらの家からも、向こうの家からも反対されたあげくの駆け落ちだったことを、ぼくは、もっと後になってから知らされた。多くの父の通夜に姿を現わすまで、白川が、どこに住んで何をしていたのか、誰も知らなかった。自分の兄が死んだことを風の噂うわさで知り、通夜に顔を出したと叔父の白川は言っていたが、ぼくはそうは思っていない。

白川に、父が死んだことを連絡したのは母で、母は、もうずっと以前から白川の居場所を知っていたのだとぼくは思っている。

白川が、ぼくと母とふたりで暮らしているこの家に顔を出すようになったのは、父が死んでから半年もしないうちであり、泊まってゆくようになったのは、二カ月ほど前からである。

その晩から、ぼくは、母のあの声に耳を澄ませるけものとなったのであった。

叔父は、いつも、シャツの一番上まで、きちんとボタンをとめていた。

白川が泊まってゆく晩は、ぼくは、期待と、そして嫉妬しつととで、おそろく、熱っぽくうるんだような眼をして、一緒に食事をする母や叔父の姿を見ていたに違いない。そんなぼくの視線に気づいていたように、母は、いつもと変わりなかった。まるで、ぼくが、母と白川との息子で、そのことをすべてぼくが承知しているものと思ひ込んでいるような、自然な振舞いであつた。

泊まってゆくようになった最初の晩から、白川は母の寝室で寝た。

世間的な常識から見れば、これは、おそらくはかなり異常なことであつたろう。

叔父が泊まった晩の深夜――。

ぼくは、時おり、浅い眠りからふと眼覚めることがある。

闇の中で眼を開けたぼくの耳に、低い、呻き声が聴こえているのである。その声が、ぼくを眼覚めさせたのだ。眠る前に聴いていた母の甘い声ではない。

太い、男の声――。

叔父の白川の呻き声であつた。

ゆつくりと、ピロードのリボンで首を締められてゆく時に、人は、そのような声をあげるのだろうか。動物が、闇の中でゆつくりと圧死する時に、そういう声を出すかもしれない。

悪夢にうなされているらしかつた。

いったい、どのような過去が、ぼくより歳上の、大人の男に、あのような呻き声をたてさせるのか――。

白川と駆け落ちしたという女性は、今、どうしているのか。

ぼくの知らない白川の過去が、不気味な生き物の影のように、下から、ぞわ、とぼくの背に忍び寄ってくるような気がした。

それは、朝まで続く時もあるし、母の何か言う声が響いて、ふいに止むこともあつた。その時の母の声は、何かに怯えたような、憎しみのこもった、あの美しい母があげるとは思えない、ぼ

くの知らないものであつた。

3

「今日は暇かい」

朝食の時に、叔父の白川が、ぼくに声をかけた。

飲みかけのコーヒーカーップをテーブルの上に置き、ぼくは、曖昧に微笑した。

「暇だったら、お昼過ぎにつき合つてほしい所があるんだけどな」

テーブルの向こう側から、白川の眼がぼくを見ていた。今、思いつきで口にした言葉ではないことが、その眼を見た途端にわかった。

ぼくは眼をそらせ、こくんとうなずいた。

「そうか」

白川がうなずいた。

かなり疲労しているらしい、顔の色だった。皮膚が土色をしていて、頬がこけている。

そう言えば、明け方、これまでにない、かなり大きな白川の呻き声を聴いたことを、ぼくは思い出していた。

何かが、叔父の精神と肉体を蝕んでいるらしい。

昼もかなり過ぎてから、ぼくは、叔父と一緒に家を出た。

ぼくらは無言で歩いた。十分ほど歩いて駅に出、電車に乗った。電車に乗っている三十分の間、ぼくらがかわした会話はわずかなものであった。

白川が、勉強をしているかとぼくに訊き、していますとぼくが答えたそれだけである。嘘だった。

ぼくは、ほとんど勉強などというものを、この一年ほどしたことはない。しているふりをしていただけであった。昨年受験した大学は三校あったが、そのうちのふたつには、かなりの確かさで、入学できたらうとぼくは思う。

受験の際、答案用紙を、ぼくはほとんど白紙で提出したのである。わざとしたのであった。表むきは、父の死がショックで、勉強に身が入らなかったためということになっているが、そうではなかった。

大学に受かれば、ぼくは母とふたりで暮らしているあの家を出なければならぬからであった。家から通える大学が近くにないのである。家を出た途端に、白川がぼくの代わりにあの家に入り込んで、ぼくから母を奪ってしまうのではないかとぼくは考えていたのだ。

電車から降りて、またぼくらは歩いた。

駅前の商店街を過ぎ、長屋風の古い建物が並ぶ路地に、ぼくらは入って行った。

両側に、植木鉢やら子供の自転車^{うきばち}が並べてある路地だった。

家の窓から、やけに太った主婦の顔や、老人の顔が覗き、このような路地に誰が入り込んできたのかといった顔つきで、ぼくらの方を見る。そういった視線に慣れているらしく、気にもとめ